やまぎと

会報１４号（２０００年冬号）

お知らせ

行事

スキー合宿in野沢　２月26日（土）～27日（日）
シャクナゲの宴　５月12日（土）～13日（日）

会報

21世紀より、年度に１冊でお届けします。

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会

秋の夜　山で一泊しました。

外は木枯らしが吹き
葉を落とした木の枝が　ギイギイ鳴っていました。
ランタンのろうそくのあかりで本を読むことも
街では味わえない　山での楽しみです。

遠くの山には　もう初雪が降り
星明かりの中でも　白くなっているのがわかります。

揺れる枝の上に　翼をたたんだミミズクが　静かにとまっていました。

テントの布までとおすような輝きが　ふたつ。

21期　竹中　Ｂｉｎ

目　　次

＊表紙 …… 21期　竹中　敏
＊「やまざと」によせて …… 会長15期　奥名　正啓　3
＊行事お知らせ …… 4
＊特集　犀奥＆ベルクハイム …… 5
　Ｑ＆Ａ、35周年記念誌復刻（ＢＨ13号、林　正一） …… 9
　高三郎標柱設置作業 …… 15期　舟田　節子　12
　現役バイト隊 …… 43期西脇幹雄、43期加藤菜就、45期深作良太　16
　2000年度小屋作業報告 …… 43期　矢田部　桂　19
　2000年秋　山小屋酒場 …… 13期　辰野　隆義　20
　ワンゲルセカンドハウス …… by　せっちゃん　22
　山渓　84.9　犀川源流の山々を縦走 …… 28期　畠山　潤　25
　「白山－ＢＨ」ＰＷ …… 30期　野田　和裕　26
　夏合宿　白山・ＢＨParty　ＢＨ33～37号復刻 …… 37期　山本　英男　49
＊特集　花・星・人in南竜 …… 54
　15奥名　０田村　４高田　８伊予　11井上　11青柳　13吉田　15高村
　15松林　15上馬　15鈴木　15佐野　15間所　15宇野　17宇野　15舟田
　18大西
＊同期会報告 …… ３西尾皓史　９鍋島武　13柴田茂樹　36奥出聡美　74
＊オブラチナヤ山登頂記 …… ７期　村田　泰恵　81
＊私の山スキーの楽しみ方 …… 26期　畠山　潤　87
＊夢・風を掴んで空へ・遠くまで飛びたい。 …… ３期　登内　郁夫　90
＊西枇杷島町水害報告 …… 37期　柴田　祐介　98
＊白山麓　出作りの村の記録 …… 11期　長岡　正利　102
＊白山のオコジョ …… 15期　上馬　康生　105
＊ＯＢ通信 …… 107
＊顧問のひとり言 …… 顧問　前田　達男　114
＊現役情報　夏合宿　秋のＰＷ …… 115
＊ネパール日記 …… 43期矢田部　桂　43期清水　健作　117
＊ＯＢ会会計報告 …… 23期　鳥越　伸博　125
付録　ＯＢ会報送付者名簿　2000年度現役名簿（42期～45期）

「やまざと」にそえて

ＯＢ会会長　15期　奥名　正啓

ＯＢの皆様いかがおすごしでしょうか。

いよいよ2000年も終わりを告げ、21世紀の幕開けとなりました。ふだんの生活においては、西暦より和暦に慣れ親しんでいるため、そう画期的なこととも思えないという方も結構多いのではないでしょうか。同じものでも見る人によっては随分と違った見え方をするものです。

ヤツデという植物は皆さんご存じでしょう。生育地沿岸とありますが、そう、北向きの便所の横などによく植えられている手のひらのような葉っぱをしたやつです。秋も終わり頃になると、丸いボールのような白い花をつけます。どちらかというと目立たないのですが、香りが強く、活動の鈍った虫でもおびき寄せられるのでしょうか。また、その香りで、臭い消しにとして便所のそばに植えたのでしょうか。

ヤツデというから８つに葉が裂けているものと思っていませんか。近くに必ずありますからよく見て下さい。実際には８つに裂けているものはありません。もともと先の尖った楕円形のような葉の両脇が裂けて３つに分かれ、その両端の外側が裂けて５つに分かれ…というふうに裂けて、７つ９つとなっていきます。したがって８つにはなりません。これはつい最近図鑑で知ったことで、実際に見てみると、なるほどその通りでした。最も多いのが７つと９つのようで、平均すれば８となるので、ヤツデと名付けたというのは、本当やらこじつけやら分かりません。最初に名付けた人がぱっと見て、８つと思ったのかもしれません。

本当によく見ないと、思っていた通りかどうかわかりませんね。まして、あやふやにしか捕らえていない事については、よくよく確かめてみる必要があります。私の周りにはもちろん、皆さんの周りにも、そんなことがたくさんあるに違いありません。

さて、我がＯＢ会は、皆さんにはどのように見えているでしょうか。もちろん一人一人皆違った見方をしているでしょうし、取り組みや思い入れも違うでしょう。思想団体や、宗教ではないのですから、それはそれで当たり前だと思っています。

でも、もう一度、ＯＢ会というものを見つめ直してみて下さい。思ってもいなかった新しい側面を見いだすかもしれません。あるいは、かつて密かに埋めておいた楽しい宝物が見つけられるかもしれません。

20深田 19栂　20久富　23鳥越　43加藤　16北川　13辰野

15舟田　43西脇　43深山　43奥野　43矢田部　43杉村

43阿納　43井澤　43小倉　43清水　15奥名　43谷上

【10月28日　新橋「こうや」にて
ＯＢ役員と、現役３回生（43期）
懇親会　現役３回生は全員】

☆☆　スキー合宿ｉｎ野沢　☆☆

（第４回ＯＢスキー合宿）

◉日時　平成13年２月26日（土）～27日（日）

◉お宿　野沢温泉　リゾートハウスふるさと

長野県下高井郡野沢温泉村6556

☎０２６９－８５－２２４１

◉申し込み　２月15日までに、メール、電話、郵便、いずれかで事務局まで。

☆☆　シャクナゲの宴　☆☆

２１世紀イベント

♪高三郎の尾根の麓の　倉谷の流れ　オロロがとれる
一度おいでよ　わが　ベルクハイムへ
オッハイヤーオッハイヤーオッハイヤー
鳴るは　ライライヨー　ライライヨー♪

ＫＵＷＶの汗が一番しみこんでいる山、高三郎。その麓、倉谷に建つベルクハイム。

「高三郎」「倉谷」「ベルクハイム」…どのキーワードで検索（？）してみても、金大ワンゲルが、筆頭にでてくるはずです。そして、リンクされてくる思い出の数々。

ワンゲル部員である限り、それらは、その時代時代の変遷の中にありながらも、みなさんの青春時代に重なってきました。

今、金沢の街も、お城も、変わりつつあります。ＩＴ革命は便利な一方、走らされている気がします。ますます変わり、走るであろう21世紀に、変わらないままの自然が、時間が、金沢の奥に残されています。

カモシカやサルが、シャクナゲやユキツバキ、カタクリやキクザキイチリンソウが、昔からのお馴染みさんを迎えてくれます。

そう、世界遺産なんて目じゃない！

我々には、ベルクハイムがあるのだ！！

✷一番美しい季節にお誘い。

✷ダム湖周辺路が、この冬ダム管理事務所により整備されています。

✷金曜日より参加であれば、資材搬入ボートに便乗できます。

✷倉谷特製　山菜メニューでお迎え。

✷いわずもがな、高三郎のベストシーズン。シャクナゲをかきわけた後は残雪の下にのぞいているかもしれない標柱をお確かめ下さい。

◉日時　平成13年５月12日（土）～13日（日）

11日（金）は資材運び兼前夜祭

出入りは自由。参加希望者の中で配車をします。

◉集合・解散　犀川ダム　（希望者は小立野工学部キャンパス）

◉参加費　３０００円　　差し入れ歓迎

◉申し込み　４月上旬　再度公告します。参加の場合、参加日程、交通手段などを提示の締切までにお知らせ下さい。

◉やること　ベルクハイムに泊まる。山菜宴会（パーティー）。

イワナの骨酒がでるかは、釣り師次第。

あと、何でも自由…釣り、昼寝、登山、散策、…etc.

少し、お手伝い…ペンキ塗り？（参加者の人数、資質により検討）

☀☀☀特集　犀奥＆ベルクハイム☀☀☀

【２０００年秋小屋作業
９月５日（火）～７日（木）】

角田	矢田部	奥野	西	山本	西脇	加藤清水	谷村	日野福
渡	竹内		日向	中川	深作		松山	村河原
								井澤

ここは某大ワンゲル部室。合宿コースを検討中。彼、彼女達は中高年ステッキ軍団の列なす山はもう意中にない。クマに会っても人には会わない…そんな日本の秘境に浸かってみたい。

あるではないか！国立公園白山から、ブナの樹海を越えて延びている北方稜線。深田百名山に惜しくも漏れた笈ケ岳を越えれば、その先には古都金沢が。夢二逃避行の温泉を浴び、きときと魚と、菊酒で打ち上げだ！

「どこ、問い合わせときましょう？」

「〇〇と、△△と…。そや、そこの地元は金沢大やろ。」

「そういえば、ちょっと読んだ資料の中に、高三郎山の麓に金大ワンゲルの非公開の山小屋があると…」

「山小屋？スゲエ！」

そう、どこの誰が、金大ワンゲルに、槍穂や剣の情報を問い合わせてくることがありましょう？

外部から見て、金大ワンゲルの「フィールド」は、白山とそこにつながる山々です。四季を通じて親しんでいる筈と思われている山域なのです。今も金沢の筋の通った山屋なら、「高三郎は、金大ワンゲルの山だ」と、答えてくれます。それほどに歴代部員の汗が、染み込んできた山域なのです。

その麓にあるベルクハイムは、「我々にも山小屋があったらなあ」の、創部以来の夢として建設されました。

「山小屋が欲しいなあ。テントより広いし、担いでいかんでいいし…。気兼ねなく騒いだり、のんびり好きなことしたり。傍に静かな山があって、スカイラインコースなんて一周がやれて、イワナ釣りが楽しめて、沢詰めもやれて、そんな場所にもてたら、もっといいな…」

人は手にしてしまうと、その良さが見えにくくなります。維持がたいへん、縛られる…（男と女の関係もそんなもの！）。

長いようで短い現役時代に、犀奥やベルクハイムの良さを知らずに、ＫＵＷＶを卒業してしまうのはあまりにもったいない。

さらには、事務局長が分析するに、もともと犀奥と、北ア他メジャー山岳は、対立する指向ではなく、メジャー山岳が「ハレ」に対しての「ケ」つまり「日常」として犀奥は位置していました。そうそうハレの山へ、時間も金も持つわけでなし…日常に親しめる山域、手軽にトレーニングもやれ、自然に浸れる…。何も地元に縛るためではなく、よりワンゲルの目的を達成するために開発されていったのです。実際、山行数が減っているのは、犀奥山域の欠落が主因のようです。

また、そうやって犀奥のよさ、部における位置づけが伝わらなくなったのは、部誌ベルクハイムの休刊に負うところ大です。手にするのは山岳メジャー雑誌ばかり、そこに載る山が山とインプットされていきます。

ついには「新道？旧道？」「砺倉？コシアゲ谷？」になってしまいました。

嘆いてばかりはいられません！
手にしているものの価値を知ってほしい！
そんな意図での特集です。

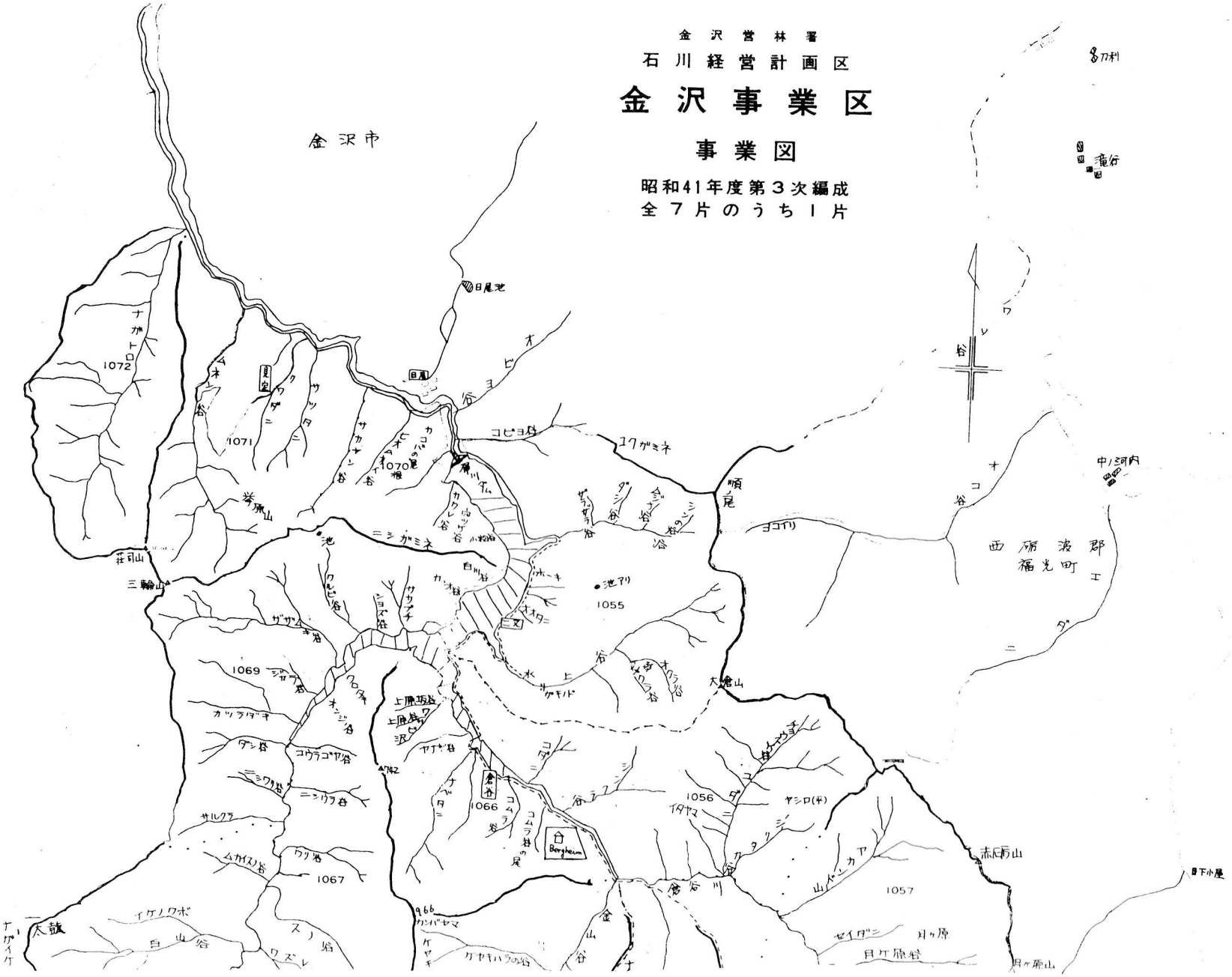
金沢営林署

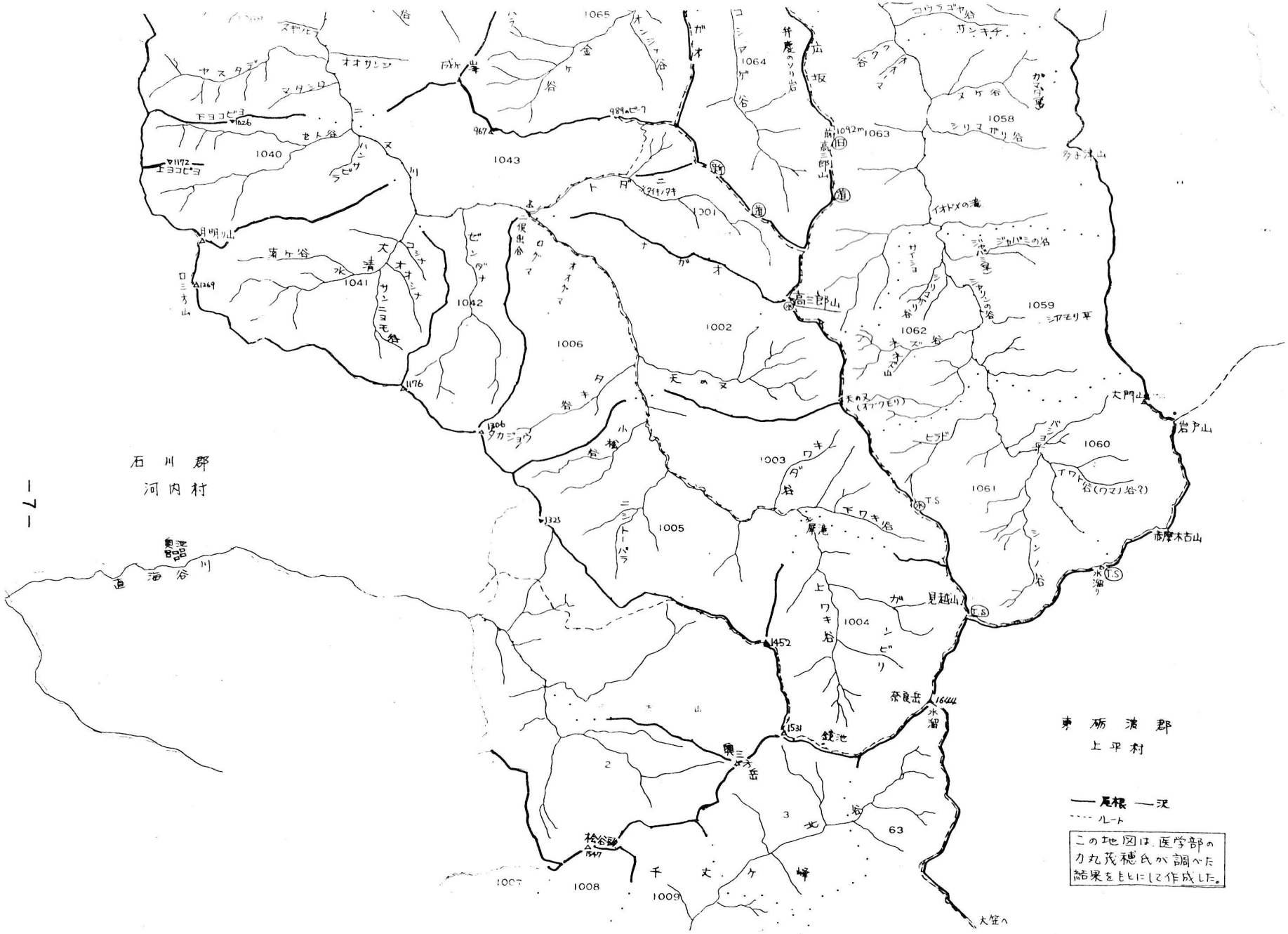
石川経営計画区

金沢事業区

事業図

昭和41年度第3次編成
全7片のうち1片





この地図は、医学部の力丸茂穂氏が調べた結果をもとにして作成した。

—— 尾根 —— 沢
---- ルート

Q．　ベルクハイムの命名は？

A．建設当時の学長により命名されました。これは部誌の名前も兼用です。

和訳すれば「やまざと」。それでＯＢ会報名も「やまざと」になっています。

Q．　どこに管理責任がある？

A．金沢大学学生部の所有物件です。経費調達・交渉・建設はワンゲル部が行いました。が、事故の際にも認識できるように、学生部内ワンゲル部が、対外的な立場です。

土地は営林署からの借用です。この賃貸料年3000円は、３年分一括で、学生部が払っています。

実質管理はワンゲル部であり、かつての小屋使用規定では、リーダー会への届け出による許可制となっていました。

なお35周年時に発足したＯＢ会は、顧問・会長・事務局長が、正式に学生部に挨拶に行っています。また、ＯＢ会報も以後必ず届けられています。これらは事故時にサポートできるＯＢ会をめざしての学生部への対応です。

Q．　なぜ、倉谷が選ばれたのですか？

A.「山小屋が欲しい！」は創部以来の夢でした。まともな部室がなかった時代でもあり、ワンゲル活動を行う野外拠点が欲しい…は、全部員の夢であったようです。その最難関は資材（資金）でした。

それが、犀川ダムの建設が決まり、倉谷の移転家屋を譲り受けられる…という、突然の解決をみることになりました。昭和38年、創部６年目のことです。

その移築先は？医王山は、有料化と俗化でバツ。国立公園に決まった白山は、あらゆる面で無理。当の倉谷周辺なら、今後の作業に便利、周囲の山が未開発の魅力。冬期使用が困難を除けば新しいホームグランド開発に最適の地と決定されました。さらには、現在地（実はお寺の跡）の高台が、平坦である、見晴らしがよい、雪崩の危険がない、河原から玉石・砂利などの運搬が楽、約百米の長さのホースで水がひけるなどの利点により選定されました。

保安林であったために、その解除、かつ正式借用ができたのは昭和39年７月です。

Q．　新道？旧道？

今、現役のみなさん達が整備しているシャクナゲ尾根の道を、「旧道」。倉谷からは、手前にある方の、ナガ・クラコシ尾根にある道を「新道」といいます。

「旧道」は倉谷に人が住んでいた時からあった従来の登山道。クラコシ尾根部分は、ワンゲルが切り開いたもので、「新道」と通称されています。

ベルクハイムが完成した翌年から、さっそく周辺の山の調査と開発が開始され、まず、高三郎が手掛けられました。

後の「新道」は、ナガ尾根部分（砺倉分岐まで）までが、ロボット雨量計設置のため、当時道がついたばかりでした。それは雨量計設置の作業員にきいて判明。部の方は金山谷をつめ、鉱山跡に至り 989ピークに至るＡルートを偵察中のことでした。

以後、判明した作業道をクラコシ尾根伝いに延ばして、高三郎へ至る道Ｄルートを完成させ「新道」としました。

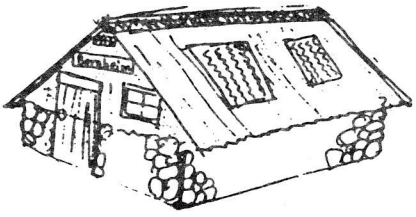
砺倉分岐からは沢へ下り、二俣川源流へのＣルートを開発。これが犀滝への道になります。

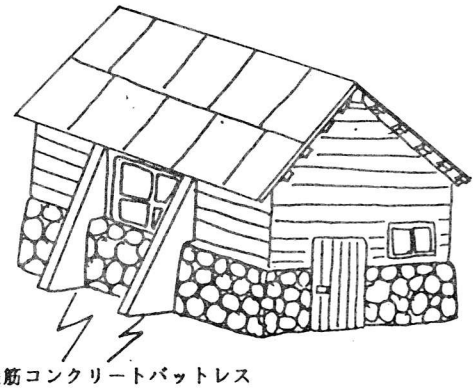
さらには、高三郎を越えて、見越－赤摩木古山－大門山－月ケ原－小屋のスカイラインコースも、考えられ、実際、見越との間には「ワンゲル平」の地名も残っています。

また、白山－ＢＨＰＷが完全縦走されてからの一時期、見越－奈良－奥三方－奥池の周遊コースが取り組まれていたこともあります。小屋作業以外に、頻繁に犀奥のＰＷがでていた頃でもあります。

そんな1980年代前半以降、時代の流れ、部員減、他諸々で、小屋作業は衰退の一歩をたどることになりました。

以上のように、「新道」に限らず、犀奥にあ





鉄筋コンクリートバットレス

る多くのルートは、金大ワンゲルが切り開いたり、あるいは修復して登山道としたものばかりなのです。

Q．　小屋の意義

A．初代小屋建設　　昭和39年　親方６期
　　全工費７万円（山小屋建設積立金、ＯＢ会寄付込み）
　二代目小屋建設　昭和49年　親方16期
　　全工費28万円（ＯＢ会カンパ）
　二代目大修復　　平成５年　親方36期
　　ＯＢ会58万円カンパ（138 名）

ＢＨ誌からざっと拾った数字です。その折々の現役が企画し、その時々のＯＢが資金援助をしてきました。山小屋は、現役とＯＢの協力の象徴でもあるのです。それが、小屋を大事にしていきたい理由の一つでもあります。

現在、新トレは高三郎を離れ、またダム周辺路の未整備から、小屋に入るのもＰＷ扱い（３週間前までに学生部への届け出が必要）となりました。年に１回、小屋作業時のみに入るという部員がほとんどのようです。

「時の流れ」…それは逆らいがたいものですが、ただ一律に流されている程馬鹿らしいことはありません。入りやすい情報、華やかな情報に流され、アイデンテティを失うのも愚かなことです。人生は短く、学生時代はもっと短い。ＫＵＷＶの情報が確かに伝わり、「もし、なかったら？」の問い掛けもしながら、中身濃い活動であってほしいと願います。

現在高三郎は、犀川源流自然環境保全地域に指定され、さらに厳重な、犀川源流森林生物遺伝資源保存林にも指定されました。日本でも第一級の豊かな自然があり、未来へ残すべき価値ある自然の残る地と認められたのです。

そんな第一級の地に、既得権で山小屋を構えているのが金大ワンゲルなのです。

ムクドリ

倉谷について

ＢＨ13号　35周年記念誌上p265

私達のクラブの山小屋は、懐かしい高三郎の麓、昔の倉谷部落の跡が今も残るところにある。その倉谷は、倶利伽羅の戦いに敗れた平家の落人が、月ケ原山を越えて逃れて住み着いたと言われている。そして江戸時代の初期には近くの成ケ峰あたりに金鉱脈が発見去れ、前田藩の金山として貢献するとともに繁栄するようになった。（金沢の有名な氷室饅頭は、夏でも雪の残っているところがあった倉谷で造られたとも考えられる。）金の他、銀や鉛も産出し、金沢城の鉛瓦まで作ったといわれ、鉱小屋や農家が合わせて二百戸もあったそうだ。鉱脈を掘り尽くし、一旦は閉山したが、明治に入って新しい鉱脈が見つかり、戸数四百、千人もの人が住む大きさとなった。今の堰堤の上流には鉱山を区切る門番があり、二輪の馬車が行き交い、轍がいつもついていたそうだ。山小屋の対岸に見える二つの黒い穴は採掘物を製錬した所で、煙が絶えなかったそうだ。

しかし、この繁栄も長続きはしなかった。製錬の煙は周辺の山を枯らし、鉱毒の出る川に魚は少なくなっていった。樹木のなくなった禿山は、洪水と雪崩となって人々を脅かした。そんな時、鉱夫と会社側とに賃金についての争議がもちあがった。鉱夫達が坑道を閉じたことで会社側は見切りをつけ、職を失った人々は次第に部落を離れていった。また昭和15年には、金山谷にあった採掘小屋が雪崩に押しつぶされ人が死んだ。そして葬式の時にまた雪崩が起こり、残っていた人までも死んだという事故があった。それよりこの鉱山は完全に廃鉱となり、人々もますます少なくなってしまった。

残った人々の主な仕事は炭焼きであった。雪の少ない半年間山に入って炭を焼き、冬になると炭俵や縄を編んで暮らしていた。その他春にはウドやワラビ、ゼンマイが採れ、屋根裏では蚕が飼われていた。一方谷間の狭い耕地である上に、冷たくて鉱毒のある水には米はできず、アワ、ソバ、アズキ等を栽培していた。そして取れた物を五箇山方面や金沢に送り出して生活していた。二又を通り拳原山を越えて熊走に出掛け、時には遠く土清水までも運んだそうだ。今でこそダムまでの広い道があるが、昔は月ケ原山を越えて富山の方へ行く方が便利で、そちらの方にもつながりがあった。

倉谷から少し下流に二又部落があり、さらに下流に日尾、見定という部落もあった。その二又には常設の分校があり、冬になると倉谷だけの冬期分校もできた。これらの部落のつながり

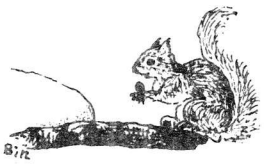
は深く、大きな血縁関係があった。冬、深い雪に閉ざされる部落は、食料不足や病気などの困難を克服しなければならなかった。病人がでたら背負子のようなもので担いで町まで運んでいったそうである。だから互いに助け合う生活であり、厳しい自然と戦いながら、一方ではその懐に抱かれて豊かな心を持った生活であった。しかし、昭和37年に着工した犀川ダム建設のため、二又部落は湖底に沈むことになり、ダムによって孤立化する倉谷の人々も、生まれ故郷を離れざるをえなくなってしまった。

ところで、今山小屋がある付近には寺があったそうだ。また私達が栗を取りに行く時に残っている鳥居や石段は神社の跡で、日吉神社といい、毎年５月15日と９月15日には祭りがあった。そこにはサルが祭ってあったという。倉谷ではサルが神であったらしい。しかし、一時サルが非常に多く出て、弁当を盗んだり、アワなどを食い荒らしたりするので人を雇って捕らえた事もあったという。また一昨年騒がれたクマも皆でよく猟に出掛けたそうで、大勢で追い詰め鉄砲を持った人が射ったという。クマは視力が劣るが耳がよく音には敏感だから、鈴を鳴らしたりするのは効果があるそうだ。またクマは噛み直すことはしないらしく、一度噛んだらなかなか離さない。だからクマを追い込む時は必ず帽子を被っていき、立ち向かってきたら帽子を投げてそれを噛ませればよかったという。それから８月から９月にかけて特に悩勝れるオロロは、ススキが多いと多く現れ、ススキを切っておくと少ないそうで、黒い色のものによくくっついて、白い色にはそれほどでもないということだ。

今残っている部落跡の家は丈夫な柱でできているけれども、深い雪に閉ざされたり、風雨にさらされたりしてつぶれてしまうだろう。しかし、一度は禿山になった林や緑は復活し、その中で豊かに生活していた人々の心が残っている倉谷。そして深くおおきな自然の愛を感じ取れる所に私達の山小屋があり、よく行けるのは幸せである。これからも大いに活用していくべきだと思う。

以上は、元倉谷の住民、現在林業事務所に勤務されている尾崎義雄さんの話をまとめたものである。

（編者注：その尾崎さんの息子さんが、スポーツ振興課の主査で、補助金のお世話になった尾崎敬志さんでした。）



（創立35周年記念誌　上巻　p14より）

私と金大ワンゲル

金沢ナカオ山岳会代表　林　正一

金沢ナカオ山岳会（以下ナカオとする）と金沢大学ワンダーフォーゲル部（以下ワンゲルとする）とは、組織としての付き合いは全くなかったが、ナカオが医王山の有料化で医王山を飛び出し犀川源流（犀奥）に活動の場を求めた時、既にワンゲルが活動の場をそこに置いており、大型キスリングを背にした異様な隊列が駒帰から倉谷への道を歩いていた。異様なというのは、当時の犀川源流は山菜かキノコ採りくらいしか山へ登っていない時代だったからである。

ワンゲルとナカオの共通点といえば、ともに会の活動となる道をもっていた。ワンゲルは高三郎の道など（注１）、ナカオは医王山にナカオ新道を持っている。これまで石川県の山には短い期間であるが、いくつかの新道というものが出来た。残念ながら高三郎の道とナカオ新道以外は消滅しており、当然それらの道を開いたグループ（会）は消滅した。自分らがよかれと思って作った道の維持に努めておればグループは維持されていたのに、と思うと残念な気がする。

犀川源流地域全体を踏査し一冊の本にして発表したのは（注２）ナカオであることから、犀川源流を世に知らしめた先駆者はナカオみたいに思われているが、高三郎山から大門山、奈良岳にかけての組織だった活動はワンゲルの方がはるかに先輩でナカオは後輩にあたる。その先輩の労を称賛することも含めて『なかお・犀奥特集号』にその旨記録させていただいた。また犀川源流の真の先駆者の労に報いたいと思い、京都山の会西尾寿一さんがまとめている『渓谷』にワンゲルの犀川源流にかける情熱を紹介してもらう段取りになっていた。しかし執筆を担当することになっていた部員が倉谷で水死するという悲劇（注３）があり、その計画は進まなかった。これと同じ時期にワンゲル部員の白山縦走の記録（注４）が眠っていることを知り、『山と渓谷』に紹介し、小さいスペースであったが載った。もう少し早く知っていたら大きなスペースで紹介されていたろうにと思うと残念な気がした。その頃のワンゲルが最も油が乗っていた時期でなかろうか、と思える。外部から見てのことなので間違っていたならお許しいただきたい。

私とワンゲル部員との接触の第一歩は金沢営林署の国有林巡検であった。昭和50年頃であったろう、当時犀川源流の国有林を受け持ってい

た金沢担当区の尾倉技官との犀川国有林巡検に行動をともにしたことからで、以後何人かの部員と接触があった。当時の部員たちは、高三郎から見越山にかけての道が荒廃しているのを見て整備しようと意気込んでいた時期でもある。「登山者にとっては大変ありがたいことだが、高三郎の道整備に全力をあげるだけで十分でなかろうか」と諌めたこともあった。手を広げて道整備に追われて苦しむことよりも、楽しみながら道作りをすることも部運営に必要なことだと思ったからである（注５）。実際ナカオ新道はそういう思想のもとで整備されている。

今ナカオに、ワンゲルに在籍したことがある会員とワンゲル部員に影響を受けた会員がいる（注６）。ともに真摯な会員で、ナカオの事業推進に大変役立っている。周辺にはマスコミや行政などで活躍しているワンゲル出身者が何人もおり、ナカオはワンゲルの最も恩恵を受けている団体でななかろうか、ありがたいことだ（注７）。

お互い、これまで同様に自然を通じて様々な体験を積み、生涯自然を愛する人間になるようにしようではないか。皆さんの健闘を祈る。

注）は全て、今回編者が入れたものです。

注１）

1958年（昭和33年）ワンゲル創立。

1960年（昭和35年）医王山開発始まる。

大池キャンプ場整備、魚帰ー奥医王間整備…この後、私有地であった医王山は有料化が決まり、部は開発から撤退。

1962年（昭和37年）白山国立公園決定。

白峰村の依頼により白山湯谷新道開発。コース選定も任された全長４km（室堂ー千歳平ー主谷ー釈迦岳）は、室堂ー市ノ瀬間を４時間で結ぶもの。これは白山ワンゲル道とも呼ばれ、さらに、シゲジー鳴谷山ー砂御前ー青柳山ー白峰と伸びて、青柳新道と称される。昭和48年までは、整備バイトの声がかかっていた。

1964年（昭和38年）部室面積を倍増。倉谷に山小屋建設予定地を発見。建設準備委員会発足。

経済白書が「もはや戦後ではない」と宣言したのは昭和31年。関門トンネル開通、東京タワー完成と、躍進の明るい気運に溢れ、新道開発や整備に団結できた時代であったよう。

注２）

昭和37年秋、医王山中尾尾根に中尾新道を開いたグループが発展し、金沢ナカオ山岳会となる。その創立十周年記念事業として取り組まれた犀川源流の調査は、記念誌「なかお・犀奥特集号」にまとめられ、山と渓谷エバニュー会報奨励賞を受賞。以後、さらに地元の山の魅力を紹介、登山者底辺の拡大などの事業を推進し、県内山岳会の雄となる。またこの特集以降に、犀川源流域は「犀奥」が通称となった。

注３）

昭和53年５月１日、19期ＯＢ高桑弘親さん、倉谷川上流で地質調査中遭難。ワンゲル部は全面的に捜索活動に協力。ダム湖畔に慰霊碑が建てられている。

注４）

昭和47年10月４日～14日の第３次白山ーＢＨＰＷ（Ｌ高村）もしくは、昭和51年10月３日～15日（Ｌ栂）の第４次白山ーＢＨＰＷ。

注５）

ＢＨ22号（35周年記念誌上巻p214）には特集「小屋作業を考える」が組まれている。

昭和49年山小屋改築。その余勢をかったごとく、登山道はワンゲル平ー見越ー奈良・大門へと延びる。これが新聞に載ったところ、県からは「遭難者がでた時の責任問題」とクレームがつき、以後急速に後退。

特集編集時にはすでに新トレ時の利用のみに落ち、作業が疑問視されるようになった。

昭和57年は、ワンゲル平の名がでてくる最後の作業。以後、新道・旧道に作業限定。

さらには、恒例といいつつ、行なわれなかったり、行っても作業をせずの状態になる。

昭和62年（部誌がなく、部室内記録から）

数年ぶりの大々的小屋作業。小屋の床腐る。

平成３年（部室内記録）この年から、新トレは高三郎を離れる。小屋は屋根もはがれ泊まれなくなる。

平成５年　３年ぶりに高三郎新トレが復活するものの、引火事故で中止。この年の秋、部室も角間へ移転。

平成５～７年　山小屋大修復

平成７年　小屋修復記念。月見の宴

この反省会の時に、金沢市の補助金を受ける団体としての申請をすることを合議。話を進めて下さったのが林さんだった。この時、ＯＢによる山小屋酒場も発足。

続く７年までの３年間は、高三郎で新トレが行なわれるも、以降、医王山新トレで定着。その主因は（事務局考察）、新人募集期間の限定及び遅延により、新人確定が連休以降となること。その後グラウンドでのテン設トレ等の、新人育成スケジュールを考えた場合に、ダム湖周辺路ですら転落者の出る高三郎は、新人にはあまりに危険と考えられたことによる。

かつ、それまでは部行事とされながら実質の無くなってきていた小屋作業は、大修復作業の継続により、部の全体行事として復活をみた。その完成後には、登山道修復が部のバイトとなり年間行事に確固の地位を占めるようになる。高三郎離れはその意味ではストップしたものの、多くの部員にとって「高三郎は小屋作業の時だけ登る山」へと変質していった。

平成10年　順次伸ばした旧道整備が、頂上に達する。

平成12年　金沢市の委託により、ナカオ主導現役バイトで標柱９本を設置する。

注６）もちろん舟田事務局長のこと。もう一人は26期難波さんの友人。さらに同期宇野さんが連れてきた会社の後輩や、17期宇野夫人の妹さんもいた。

注７）白山自然保護センターの上馬さん。県自然保護課の栂さん。新聞社の松林さん、ＮＨＫの沖野さん。また、そういったマスコミと同行の現地取材の際に、バイトに出ているのがワンゲルの現役達。

高三郎標柱設置作業

15期　舟田　節子

＊プロローグ

高尾・吉次山、高三郎の道標設置は平成11年の春には耳にしていた話だった。その時には、高三郎についてはワンゲルが請け負うの話がなくもなかった。但し、その発注元の金沢市スポーツ振興課は、翌年のスポレク祭準備に追われることになり、話は宙に浮いたままとなる。

もとより私は、仕切っているようでいて、現実には書類をきちんと提出したり、伝達したりなどの事務の円滑化しかやれない。どこに、どんな材質の物をと、協議できるような器ではない。だから、「そういった折衝はナカオの林代表にお任せ、あくまでワンゲルは現地作業の下請け」が、はじめからの心積もりだった。しかしながら、いっこうに参加者の増えない山小屋酒場の点からは、「この時ぞ」とＯＢが乗り出してくるとは考えにくかった。また、現役の登山道修復作業にしても、悪天だの、私用だのと腰が引けている。

金大ワンゲル伝統の山！と見栄張って受けたとしても、その後をどうする？

あけて平成12年。雪溶けをおって、吉次・高尾山の８本の標柱は、３回の施工山行で、完了する。「ナカオが受けた仕事だから」で、参加する会員、受けた規格以上にどうしたら長持ちするかの工夫を楽しむ集団…その中にありなが

【昨夜、受け取ったままで積んできたという標柱。目的の高三郎はかなたに。】

元藤　浅野　谷　林　田中

ら、ワンゲルはとてもこんなこと出来ないと、ため息をつく自分がいた。

そのあたりは、毎度ＯＢ会報を贈呈している林代表にも感知できたのだろう。「秋には泊りがけで高三郎をやる」と、「やったー」の余勢のままに発表があった。ホッとする。さらには、「山上に立てる３本の標柱の運搬は、ワンゲル学生の個人バイトで」も追加される。それなら、「ワンゲル伝統の高三郎」のこだわりも満たされる。「泊りがけ」には、わがベルクハイムを使っていただくことになった。

こうして、５００人もＯＢがいながら…と、ただただ、情けなく、腹ただしかった話は、きわめて現実路線での決着をみることになった。

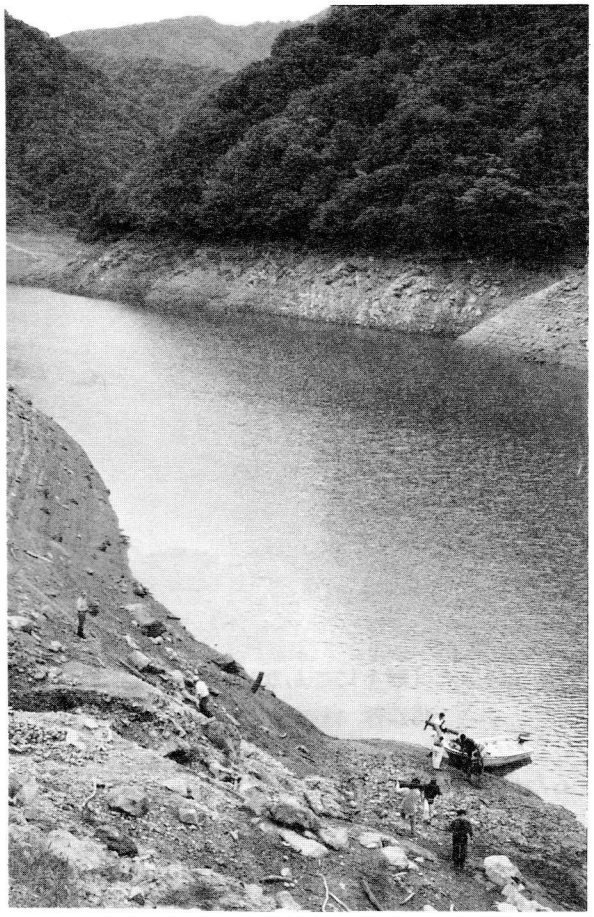
なお、現役バイトについては、小屋作業チーフの矢田部君に、作業で集まる機会に探してもらった。３回生の加藤君（11期加藤忠好氏jr）西脇君、１回生の深作君が名乗りをあげてくれた。

＊参加者
９月30日のみ　今村、谷、野村
９月30日～10月１日　林、古源、浅野、元藤、
　　山口、田中、佐々木、舟田　山本
　　加藤、西脇、深作（左記３名は現役）
10月１日　寺川　曽谷

＊９月30日（土）

標柱が出来上がったのは、昨夜の９時すぎ。塗料がまだ手につく程の代物だった。だから、春先ボートで倉谷に運びこんでしまう…の手も使えなければ、平日のみ可の、ダム管理事務所のボートも使えなかった。ボートは、つてを探して猟友会の方に出していただくことになる。さらに、道路は工事中で、ゲートが閉められており、鍵を借り受けて通過など、すべてに尾鐙がつくような状態で、ダムに到着。

案の定、水位はぐんと下がっており、ダムの階段をずずっと、下りて、さらにヘドロの斜面をつたってでないと搬入できない。これでは危ないからと、初めから崖斜面になっている舟着き場へ移動。９本の標柱とは、高三郎の頂上、クラコシ尾根分岐、砺倉分岐、旧道取り付き、新道取り付き、金山谷手前、倉谷集落跡、吊橋を渡り終えた所、犀川ダムといった、内訳である。全長1.5m、重量８～15kgのこれらに、スコッパ、セメントなどの作業道具と資材、食料、酒、小屋泊個人装備を４往復で搬入。但し、ボートで入れたのは第２の切れ込みを通過してすぐの所、出島の300m手前の張り出し部分までだった。水平道にあげるまでも一仕事。そこから倉谷まで、さらに徒歩での搬入。



【湖岸を降りて搬入。この水位では…】

足場の悪い所での大物のボッカは私達女性には無理と、私と佐々木さんは、小物だけかかえて小屋に先行。窓をあけ、床板をはめ、水を出す。これが、ホースをうめていた砂をどけても、チョロチョロとしか出てこない。ようやく上がってきた西脇君に聞くと、今月初めの小屋作業の際には沢が干上がっていて、水は使えなかったそうだ。

ここで昼食。ビールはそんなわけでまだ冷やせず、まだこれから作業もあるしでお預けとなる。小雨が次第に大粒になりだす。「下部の標柱を設置、上部の標柱はできるだけ担ぎあげておく」の予定で、作業開始。日帰りの人達もおり、３時が本日の作業リミットだ。

担ぎあげの３本については、しっかり荷造りをしなければならない。さらに、上部に設置の物は簡単に補修とはいかず、念入りに防腐措置を施しておきたい。というわけで、ワンゲル関係の私達は残り、浅野さん考案の、アスファルト塗布の麻布を、加熱しながら標柱に巻きつける作業を手伝う。さらにブリキキャップをかぶせるため、先端を切り、これで加工終了。臭いのきついそれを背負子にくくりつけ、いよいよ運搬開始。腰から伸びる1.5mは早速枝に引っ掛かる。足元は見なければならない、上にも注意しなければならない、かがめばバランスが崩れ

【頭上にこんなに突き出る】
45深作 43加藤　浅野　43西脇

るため、後ろ手に背負子の下部を押さえなければならない…で、合羽軍団はしんどそう。彼らの個人装備をザックに持って後ろについた私は、「もっと右」とか「ＯＫ」とか言ってはみたが、どの程度の枝にどの程度かがむかは、体得するしかないことで、間に合いはしなかった。

新道取っ付きに着いた時には、先行の作業隊は、もう旧道口の設置、戻ってきて渡渉前地点に「金山谷」の設置を終え、３本目の新道取っ付きのテン場横を掘っているところだった。

ナカオ式は、下部に横木の付いた標柱を50cmほど埋め、30cm高のステンレスロールで接地面周囲を巻き、標柱とロールの隙間にモルタルを詰め込んでおく。標柱は接地面から腐り倒れてしまう。山中という作業条件下で、どうしたら下部の腐食を防ぎ長持ちする施工ができるかと考えだされた方法だ。行政は発注するだけ、請負はともかくやればよかろう…的な仕事をよく目にする中で、こんな工夫はやっている側も気持ちがよかった。吉次山での８本の先行体験により、掘った土の置場、骨材の石の大きさ、各所に配置していくセメント、水、砂の量などにも配慮できるようになり、現場の地質のみが、作業所用時間を左右するレベルになっていた。

担ぎ上げの方は、砺倉分岐用の１本のみを、現役の３人交替で、３時までと、送り出す。作業隊は上記の防腐作業を設置した２本に行い、そこへ残しておく２本の標柱を背負子にくくり直し、防水シートを巻いた。女性軍は日帰り組と先にそこを離れ、食当にかかる。

本日は、（秋といえば、秋の山小屋酒場メニューといっしょ）栗ご飯に、豚汁、焼き秋刀魚、その他酒の肴。現役も何杯もお替わりをしてくれたから、飯場のオバサンは嬉しかったです。林さんの調整で水ももう少しましに出るようになり、水洗トイレも使えるようになりました。食当の間は、湿気でうまく嵌まらなかった床板を調整しては嵌め込んでいただき、その前にはアスファルトの特製防腐剤も根太に塗っていただきました。おりしも雨は激しくなり、「テントやったらたまらんかったな」と、皆さんには大いに小屋を讃えていただきました。私も大いに小屋を自慢し、利用していただけたことが嬉しかったです。テントでもなく、商売小屋でもなく、手作りの暖かさのあふれた小屋。関わった全員がろうそくを囲んで語り合える空間は本当に贅沢。それをナカオの仲間ともやれたことが幸せでした。小屋の歴史を語った時、空が見え、内部に萩が茂っていた時期もあったことを久々に思い出しました。小屋に関わってくださった皆さん、本当にありがとう！

10月１日（日）

夜中には何度も雨が激しくなり、その度みなさんテントでなくてよかったと思ったそう。そして朝はさわやかに晴れ。

本日、新道は１回生の深作君がチャレンジ。付き添いは山本さん。昨夜遅くに小屋入りしてくれたが、吊橋の所からパカパカ靴底が開いてしまったそう。これじゃ全行程は無理と、針金で結わえて、砺倉分岐までの同伴となった。

旧道は、３回生の西脇君が「高三郎頂上」を加藤君が、「クラコシ尾根分岐」を担いで上がる。彼らの荷物を私が担いで同伴。あとの作業隊は、新道からあがり、砺倉分岐の標柱を設置後、クラコシ尾根を経て、あとの２本を設置と、周回と作業を平行させることになる。この春その周回をやって、クラコシ尾根の藪に懲りていた私は喜んで、彼ら若い燕の守役についた。

彼らは交替にトップをやる。トップは枝払いとクモの巣ベタッの洗礼を受けることになる。合宿の重量に慣れている彼らには、長さの方が扱い兼ねる代物だった。３週間前、もっと気合いをいれて登山道修復をやればよかったと、かぶさる枝に罵っていた。後ろについていた私は、彼らがずっこけると丸太の直撃をくってしまうところだったけれど、ズルッとなってももう片方でピタッと止めてしまう彼らのバランスのよさにさすが若いと感心してしまった。もう私なんかは、転ばぬ先の杖的登り方をやっている。そのうち慣れてきた彼らの方がピッチがあがり始め、私は丸太の直撃なんて心配なしに、彼らの休んでいる所へ追い付くようになった。

【ナカオ・
ワンゲル
合同設置隊】
2000年10月１日

舟田　山口　43西脇　43加藤　佐々木　林
浅野　　元藤　　(by田中)

やはり彼らも、新道、旧道がおぼつかない。クラコシ？砺倉？という具合に、登山道を開いてきた伝統も、小屋の歴史も知らない。「今の現役は…」と言いたい所だが、今一緒に汗を流している私は、知る機会がなかったから知らないんだと率直に理解できた。部誌がなくなって部内で伝えられるものがなくなり、情報は山渓や岳人といった商業誌からのみ入ってくる。槍や穂高など、メジャーな山ばかりがインプットされて、犀奥は好み云々以前にインプットもされていないのだ。嘆く前に、きちんと伝えてあげなければ…。

加藤君の父上は11期で、旧知の方だけに、その息子からの話はゆすりの種にできそうだった。但し、お人柄どおりに大ネタはなく、ケーキをせしめるのが関の山か？家族登山が山の馴れ初めという西脇君は、この秋休みはベトナムへ18日間の旅に出ていたそうだ。あいかわらずきつい登りだったけれど、休憩時間におしゃべりをしながらの山は楽しかった。面倒だろうけれど、本当はいきなり飲み会より、一緒に汗を流した後であった方が好ましい。

ついにクラコシ分岐に着いた。ほどなく林さん達作業隊が着き、穴堀りもあるからと通過していった。クラコシ尾根は春のとおりに荒れたままだったらしい。「新道はわしの持ち場」と言っていたあのM氏の小屋掛けは、金山谷にはなかった。もう高三郎へは入ってこないのだろうか？

彼らは、深作君を待って一緒に来るという。私も頂上へ先行する。分岐からは、よく苅り開けがなされていた。頂上の東側も開けてある。根曲竹の根を堀り、出てきた岩盤はバルーと金槌で割りおこし、穴さえあけばいつもの手順。「俺も男や！」の西脇君が担いできた標柱を埋め込む。深作君は砺倉まで運んだ所で、戻ったらしい。一昨年立てた、石川君製作の看板は割れて落ちていた。この地で積雪に耐えるにはこれだけの物でなくては。こんな物を運ぶ人や、設置を請け負う団体はもう出てこないに違いない。今ホッとして座っている彼らも、今後何度もよかったと反芻できるに違いない。

栄光の記念写真を撮った。

クラコシ分岐においてあった分を埋めて、作業は終了する。加藤君達は先に新道経由で下りて行った。秋の日没は早い。あとは時間と競争の下りだ。急げばなおのこと、こんなひどい下りはないと思える高三郎。沢でのザブザブとゴクゴクで、やっと息がつける高三郎。そう、ミレニアムに２回登ってしまったよ。バイバイ、高三郎。

小屋では深作君と、もう加藤君、西脇君が横になって待っていた。２週間後には山小屋酒場でまた来るから、小屋はざっと片づけてで施錠する。もう薄暗い。ダムサイトのやばい所を少しでも早く通過してしまわなければ。倉谷集落跡と、吊橋の標柱は、本日入山隊が設置しており、証拠写真をフラッシュで撮る。

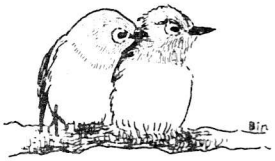
無言の特攻隊は、足元が見えなくなりかけた所で、ダムに到着。ああ、こんな明かりの着いたダムは、第３次白山－ＢＨ隊を迎えにきたあの時以来だ。最後の浅野さんが到着し、ご苦労さんといいかけたところで、「田中さんがいな

い！」。列の間にいたのに、距離があき、どこかで迷いこんだらしい。結局彼は見つかったのだが、現役と、女性軍は、そんな騒動のうちに先に帰らせてもらった。まあ無事だったということで、最後の最後まで、印象深い山行となった。

＊エピローグ

高三郎に立った標柱、何人のＯＢが確かめにくるでしょう？加藤君は「息子を山に煽ったオヤジが、当然見にくるべきだ」と言っていました。そう、オヤジより年上や、オヤジより重いのが、高三郎で作業してましたからね。それを彼は見てしまいました。

その意味では、この標柱物語はいまだ終わっておらず、続編を乞うご期待といったところです。

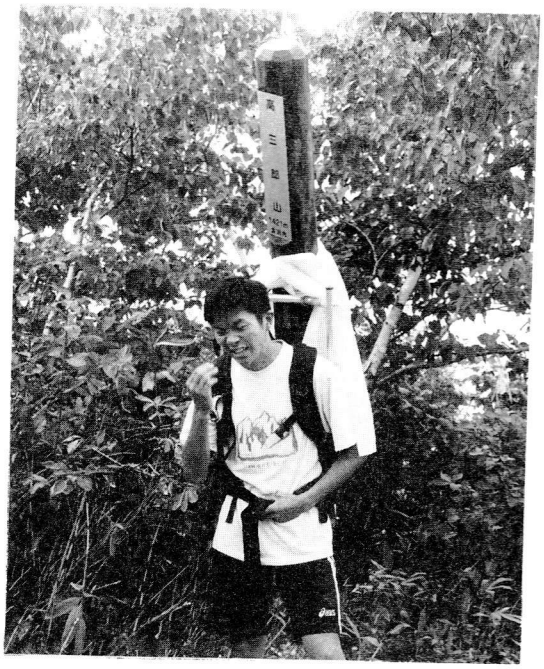


43期　西脇　幹雄

高三郎山頂の道標を運んだ男です。

道標は10kgちょっとなんだそうですが、長さが問題でした。高三郎ぐらいの標高の山だとそこらじゅうの木に、背負っている道標がぶつかります。その度にかがんだり、少し戻ったりの繰り返しでした。腰が痛かった。

山頂付近に来ると、秋の小屋作業で整備した成果が目に見えてわかり、歩き易かった。でも



【「記念写真！」にポーズを決める西脇君】

それは、高三郎の旧道全体のほんの一部にしかすぎず、うちらのガンバリ不足を感じた。

そうしてやっと山頂に着いた。いつもどおり、見晴らしの悪い山頂が僕等を迎えてくれました。

下りは空荷で、初めて新道を下った。なんちゃら分岐（砺倉分岐）までは、結構ひどい道でした。でも、見晴らしはよかった。分岐から下はよく整備されていて、コースタイム 100分のところを30分ほどで走って下った。

この日ダムに帰り着いたのは、暗くなるほんの直前。小屋作業より辛かった。

来年以降も小屋作業頑張って、高三郎の道をよくしてやって下さい。

43期　加藤　菜就

年に小屋作業のとき一回のみ登る山。粘々した蜘蛛の巣、足に絡んでしつこい蔦植物、天候のパッとしない秋山行。今の現役生の中にはワースト３に必ず含む人もいる。彼らほど嫌いじゃないけど、好きにもなれない山・高三郎。

そんな山に、今年は二回目の登山をした。道標を立てることが僕の仕事。

道標は、話によると白山に立ててある物と同じだそうで、がっちりとした造りだった。内心「高三郎にこんなのが必要なのかな。」と思ったが、結局、これを運ぶことによって、後々(小屋作業の続く限り)、ワンゲルの中で語り継がれるという充実感があった。

しかし、充実感を味わうのはどうやら早すぎたようで、道標を持って歩くことはとても辛かった。長さ 1.5M の道標を背負子に担いで歩く際、１Ｍ ぐらいは頭からはみ出すので道に枝などが張り出しているときなどは、中腰で歩くのだけれど、これが一番しんどい。

足を曲げればいいと分かっているけれど、曲げるのにも限界がある。これ以上曲げると足を前に出せないというときは、仕方なく腰を曲げる。すると、道標の荷重が前(頭)にかかり、体が前のめりになる。実に危険だ。実に危険だと体の方は、頭で考えるより早く、それに対処する。背筋に力を入れ、頭をあげ、首で前に倒れそうな道標を支える。

こんな作業をそれこそ20分していると体がだるくなる。腰に変な鈍痛というか、違和感を

感じるし、気分的に無性に腹が立つ。自分たちが作業した道も道標を持って歩くと、まだまだ歩きづらい。だから腹が立つ。「もっときちんと刈り込んでおけばよかった。」と思うとやっぱり腹が立って、立ちすぎて口からは苦笑いしか出ない。

苦笑いじゃなく、もっと悪態を吐きたいのに苦笑いしか出ないのはなぜ？

30 分に一回、休憩を自分がとりたいだけとる。舟田さんからお茶、葡萄、ミカンなどをいただき食べる。大抵の山行は行動食も食べずに過ごせるのに、このときの行動食の美味しいことといったらこの上なかった。特にミカンが最高。あの絶妙なすっぱさが一番おいしく感じた。

辛い歩荷と、天国のような休憩を繰り返しているうちに上の新道と旧道の分岐についた。いつも、旧道を歩きながら「この赤布は何のためにあるんだろう？。」と思っていたところが分岐だった。草も刈ってないし、見ただけじゃ分岐だと思わない。

僕の持っていた道標は分岐用だったので、頂上までは西脇の持っていた道標を二人で担いでいけばよく、気分的にはここから少し楽になった。舟田さんは先に頂上に向かったので、西脇と少し話をしてから出発した。分岐から、頂上まで 40 分。僕の提案で、最初の 20 分を僕が、残りを西脇持つことにした。

我ながらなかなかの名案。ここまで頑張ってきた友のために頂上歩荷到着は譲ろうということ。西脇も喜んでいた。

ところが、最初の20分(正確には17分)僕が歩荷して、「さぁ西脇の番。」と交代したが、頂上に5分も経たずについてしまった。

頂上では中尾山岳会の林さんたちが先に到着していて、道標を待っていた。僕たちが到着すると、林さんが寄ってきて「よっしゃ、記念の写真をとるぞ。」と言うので道標を持ったままの西脇と並んで写ろうとしたら、

「こらこら、手ぶらのやつがいたらわざとらしい写真になるだろが。」

「えっ？。」

「どいて、どいて。君は今着いたような感じで。」

と、今着いたような感じを出している西脇だけを撮って、僕は撮って貰えなかった。

「ちょっと待って？分岐からおおく運んだのは、僕なのに？」

「西脇っ！！いいとこ取りするなぁぁ！！！」

あとで、こっそりと愚痴を言うと、西脇は

「本当や。ふふふふ。」

と、うれしそうだった。

【こんなに刈り明けてあった高三郎頂上。
割れた看板と、新しい標柱。そして三角点。】
43加藤　　43西脇

舟田さんから手紙を頂き、新田次郎の「強力伝」を読んだ。小説の強力はとても辛そうで肉体の限界に挑戦しているかのようだった。仕事を終えた後、主人公は成長ではなく逆に肉体を傷つけてしまうし、仕事を引き受けたことを後悔していた。

僕は、確かに歩荷中は引き受けたことの後悔を感じていたけど、やり遂げたあとの満足感に浸れたと思う。一番の収穫は高三郎山への愛着を少し持てたこと。

山道でやはり、道標があるとそれが目標となって、歩き続けることに覇気がでてくると思う。頂上までの所要時間が分かるわけだし、自分の体力とも相談ができるから体力に応じたペースをとることで登りやすく感じる。

登りやすく感じてくれれば、2 回、3 回と登りに来てくれる人が増え、ますます道が整備されて、ますます登りやすくなるかも。

高三郎は好きな山じゃない。好きじゃないけど、愛着が無いわけでもない。新道ワンゲル道の倉越尾根からの眺望は最高によかった。岩山だけあって、谷筋に続く岩肌に感激した。

がむしゃらに登るだけじゃなく、愛着を持った山を整備することが大切に思えた。
そう考えると、今回高三郎山を整備できたことに感謝したい。

【現地でプレートを貼らねばならない標柱もあった。
その結果、一番重い標柱が、最短コースの砺倉分岐に割り当て。
つまり一番重いのを担いだのが、深作君。】
田中　林　43西脇　　45深作　43加藤　古源

45期　深作　良太

全く登山初心者の僕が、バイトin高三郎を決行したのも、先輩の一言からであった。

初めはちょっぴり不安もあったが、山岳会の方々や先輩に助けられ、非常に充実した、また秋という季節ということもあり、実り多い二日間になった。

またお声がかかれば、絶対参加したい。
やっぱり、肩と腰は痛い！！

（私信ですが、ご紹介）

この前の二日間は、色々とお世話になりありがとうございました。山岳会の方々には、いろいろと助けていただき、また、特に、小屋での夕食－栗ご飯、焼秋刀魚、豚汁－は、秋の到来を感じさせてくれました。ワンダーフォーゲル部で行く山行とはまた違った山行を体験することができ、非常に思い出深い二日間となりました。

初めのうちは余り楽しさを感じられなかった登山も、部での夏合宿、そして今回のバイト等を通して、面白さを感じられるようになってきた今日この頃です。

写真の同封ありがとうございました。そして、原稿料も!?原稿の方、同封させて頂きます。

また機会があれば、絶対参加したいと思っています。

追伸）行方不明となった田中さんがみつかったと聞いて、ひと安心しました。

２０００年度
小屋作業報告

小屋作業ＣＬ　43期　矢田部　桂

今年度の小屋作業は、例年よりいくらか早い時期ではありましたが、９月５、６、７日の２泊３日で行なわれました。

私を含むワンゲル部員の何人かは、数ケ月前に、ベルクハイムの修繕の仕事のお手伝いを、ＯＢの方と一緒にさせてもらいましたが、その時は犀川ダムの水面も高く、資材の運搬をボートを使ってやることができました。その際に、船上から水辺に沿った道の様子を見ていましたが、どうもあちらこちらで崩れている所があるようで、とても心配でした。

確かに例年登っている高三郎山への登山道ですが、お世辞にも歩きやすい道ではないことは分かっていました。現にダム沿いの道は細く、かつ下草が茂っていて、毎年何人かは転落（とはいってもかわいいものですが）する人が必ずでてくるくらいです。ましてや船上からの数々の崩れを見てしまっては、この先、小屋作業のチーフリーダーとしての重い責任に身が引き締まるような思いでした。

夏合宿を終えて２週間程経った頃、サブリーダーである谷上をはじめとした数人の部員と共に、高三郎山への偵察に出掛けました。

まず、予想外のことに、発電所近くのゲートが閉じており、そこから延々と犀川ダムまで歩き、まるでガスがかかったようにオロロにたかられ、自分の身長より高い草を掻き分け、崩れた細くなった危険な道と格闘しながらベルクハイムを目指しました。ベルクハイムに着いた頃にはもうすっかり時間も過ぎ、その時のメンバーにはピークに行く気力は微塵にも残っていない、それくらい疲労困憊していました。

今から思えば、その偵察が一連の作業の中で最も大変だったように思います。

天気が心配された９月上旬でしたが、ＣＬの日頃の行いの為か大気も安定し、いいお天気に恵まれました。ゲートの方も許可をもらうことができて、無事車でダムまで行くことができましたし、心配していたオロロもすっかり影をひそめていました。

ダム沿いの道も草がきれいに刈られていて、ずいぶんと歩き易い道になっていました。ダム関係の方が刈ったのかななどと思っていましたが、後になって、小屋作業当日は不在だった部員の一人である久原がなんと一人であの膨大な量の草を刈っていたのだと知りました。彼には大変感謝しています。

一日目はベルクハイムまで行き、そこから半分に分かれて、片方はベルクハイムおよびその周辺の整備、もう片方は登山道の途中までの整備を行いました。どちらもみな頑張って作業してくれ、かなりはかどりました。私は登山道の方でしたが、帰ってくると、ベルクハイムに敷き詰められた、真新しいきれいな床が私達を迎え入れてくれました。

二日目が今回のメインともいうべき作業であり、全メンバーで高三郎に向けて早朝出発しました。今年は全員にピークに立たせてあげたいとの想いもあり、そのように計画を立てていたからです。ピークはさすがに遠く、計算していたより時間オーバーしてしまいましたが、やっとのことで全員無事ピークに立つことができました。

思っていたとおり、ピークは草、笹が生い茂り、そこからの眺めはあまりいいものとは言えませんでしたが、それでも、辛く、長い急坂を登りきった後のピークは感慨深いものがありました。ただ、残念なことに、２年前に設置した標板がもう傷んでぼろぼろになってしまっていました。

休憩をとった後、下りながら作業していきました。さすがに全メンバーで来ているだけあっ

43加藤　43清水
43西脇　45中川　43井澤　44山本　45竹内
45日向　44谷村　43谷上
44西　44福村
45深作　44角田
44河原　45渡　45松山　43矢田部　43奥野

【今、この頂上に、フラッペ伝説はなく、自動販売機伝説が流布されている。】

て、作業は流れるように進んでいきました。鎌や鉈、鋸を持つ手が痙攣をおこしそうな程必死に取り組んでいましたが、時間が過ぎるのも早いもの。気が付くと辺りはもう夕日が差し込んできそうな時間になっており、部員の尻を叩きながら急いで下りました。

小屋に着いた時にはみなヘトヘトで、なんだか静かな雰囲気が漂っていましたが、さすがワンゲル。食当をしているうちに、お腹がすいているせいか、いつもの賑やかというかパワフルな雰囲気に戻っていて、各パーティー、ご飯をもりもり食べていました。

最終日は再び小屋の周辺の整備と小屋の掃除をして、ベルクハイムを後にしました。

実際に作業に入ると、案外ＣＬというものはすることが少なく、かえってサブチーフの方が忙しそうにしていたのが印象的でありました。

今回の一連の作業は様々な人からの助けをいただいて、大変満足のいく仕事ができたと思っています。ＯＢ会舟田さんはじめ、部員の一人一人に対して本当に感謝しています。ありがとうございました。

来年からもいい仕事ができるように頑張って下さい。

2000年秋　山小屋酒場

13期　辰野　隆義

20世紀最後の山小屋酒場となった。（今年やることは、何でも「20世紀最後」となってしまうのだが…）　今回は個人的に仕事が忙しく、行くこと自体危ぶまれたが、何とか日曜朝帰りで折り合いをつけた。

今回の作業は、そう多くを考えなかった。材料も下見をしてあったので、１週間前には揃え終わった。作業は、「入り口の柱（腐って浮いている）」と、「奥の根太（白アリにやられている）」、それに「外の屋根を支えている木（これもボロボロに腐っている）」の取り替えと補修である。この程度の作業なら、土曜日一日でも完了するだろう。

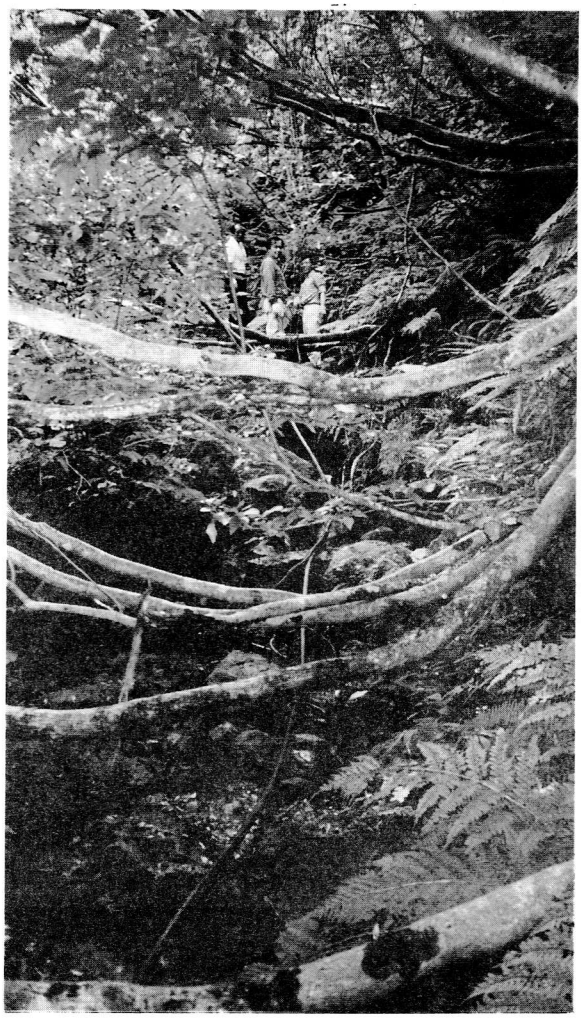
10月14日（土）朝８時、工学部集合。いつものメンバーと顔を合わせる。今回は田村御大は寿欠席と聞いている。13期吉田、吉本、辰野、15期奥名、舟田、16期北川、以上６名。天気は上々、この上ないリフレッシュになりそうだ。

２週間前に現役数名と、舟田さん、ナカオの人達が、高三郎の頂上まで重い道標を背負って上がり、設置してきたとのこと。途中、真新しい道標を２基発見。なんとなく顔がほころぶ。

小屋はいつもと変わらず、私達を迎えてくれた。最後の急坂を登り終え、目の前に小屋が見えた瞬間、本当にホッとするのは、私だけではないと思う。

さっそくビールで喉を潤した後、各自作業へ入る。

以前から気になっていた取水口のステンレスカゴの修理にとりかかる。というのも、私も、



【ホース内の空気を抜くのが至難】
辰野　　吉田　奥名

奥名君もカゴの砂を取り除こうとして、壊れたメッシュで指を切ったことがあったからだ。このステンレスカゴは、２年前の大雨で流され行方不明になっていたのだが、翌年行って見るとちゃんと戻っていた…という不思議なカゴなのだ。

メッシュを整えたものの、パイプの途中で砂でも噛んでいるらしく、なかなか水が出てこない。簡単に水場の修理を終えるつもりが、結構時間をくうことになった。結論としては水圧が低いということになった。カゴが流された時パイプも被害を受け、取水口がかなり下方となってしまったためである。取水口をもっと上へ延ばすのは、来年の課題としておこう。

昼食後、本来の目的箇所の補修作業に入る。入り口の柱も、奥の根太も、まくってみると、思っていたより損傷がひどく、持参した資材だけではややきつい所もあった。が、春の床張りの時の余剰材を利用し、何とか補修を完了させた。

作業をしながら他に悪い所を探す。いくら「無理せず」「楽しく」がモットーにせよ、要補修箇所優先、効率よい資材搬入で予定を立てていかねばならない。

あった、あった、大物が！小屋の屋根を支えている三角形トラスの最も力がかかる横の梁が１本（入り口の上）、腐ってボスボスになっている。これを放っておくと、早晩小屋は雪の重みで潰れてしまうだろう。とはいえ、あんな大きな梁を付け替えることは不可能に近い。別の方法で屋根を支えることを考えるしかないだろう。

また、屋根のトタンに少し錆が出てきている。これも次回の春にやらねばいけないだろう。

作業も終わり、あとは恒例の秋ならではの夕食。半分はこれが楽しみで来ているような所もある。近江町と、倉谷現地で調達した栗がふんだんに入った栗ご飯。大根おろしたっぷりの焼き秋刀魚…あとは、実にうまかった…で、ご勘弁を。秋は暮れるのが早い。ローソクの明かりで視覚情報が不足したのと、カメムシを食べてしまわないよう、そっちに結構気を遣ったからである。

そんな無礼の報いを彼らは十分に受けることになりました。イヤー、今回は全員狂ったようにカメムシのロウ地獄に興じました。御蔭で、天井にびっしりくっついていた無数のカメムシが、寝る頃にはほとんどいなくなってしまいました。久々に学生時代を思い出し、懐かしい限りでした。北川君は夕方下山したため、このイベントには参加できず、残念でした。

翌朝は６時頃に起床し、朝食の後、たまむし御殿（汗水の結晶のトイレのこと）にて快便。生活環境がよいと、快調ですね。その後早めに下山、2000年秋の山小屋酒場を終了しました。

まだまだ今後も、山小屋を維持するためには手を入れ続けなければならないでしょう。が、とりあえず、当初目標の、水場の確保、トイレの設置、予定外の床の張り替えも完了し、なかなかの居住空間が復活しました。前回「月見の宴」から、既に５年を経過しており、この際お披露目も兼ねて、来春、第２回目の宴「シャクナゲの宴」を山小屋にて開催しようということ

になりました。予告はこの冊子の他のページにも載っているはずと思うのでご覧ください。そして、多くのＯＢ、ＯＧが参加して下さることを願う次第です。

その折りには、屋根のペンキ塗り等、楽しい軽作業も準備いたしておきます。もちろん、一日魚釣りでも、日向ぼっこでもかまいません。足に自信のある人は高三郎へチャレンジされ、道標を確かめにいかれるのもＯＫです。

ともかく、ベルクハイムで、昔へタイムスリップするのも、21世紀の幕開けには良いのではないでしょうか。

ワンゲルセカンドハウス　by せっちゃん

2000年締めの山小屋酒場は、かなり気を抜くことができた。というのは、２週間前に標柱設置作業で小屋に行っており、ともに食料係であった私は、メニューも一緒、調味料・燃料もそのつもりで…の合理化（手抜き）を図ってあったのだ。さらには、シュラフや個人装備も置いてきてあって、その分今回は小屋常備用の食器類を詰めてこれた。小屋との距離感のなさが学生時代みたいで、そんな気軽さがなんとなく嬉しかった。

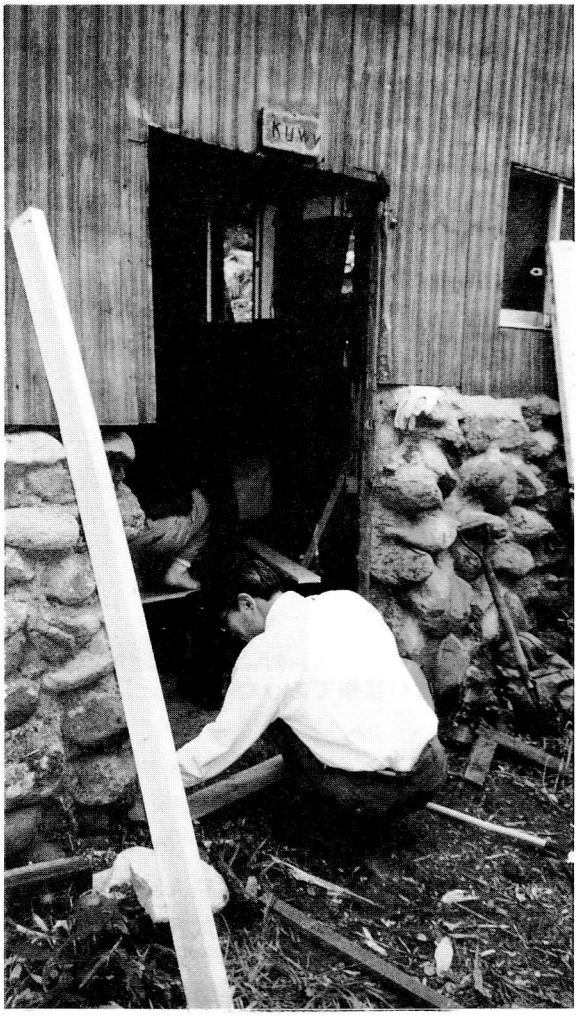
ダムから覗き下ろす湖面。あれ、この間より多いよ。それは、カメムシも同様で、２週間前には数匹しかいなかったカメムシが、びっしり天井を埋めていた。「今年の秋は水が少ない」だの「カメムシが少ない年だ」のと、うかつには言えないものだ。

ともあれ、資材を５等分して、つまり、私は食材いっぱい詰めてんだからねとパスして、あと５人の男性軍が長物をヨイショと運ぶ。中で一番の厄介物は、北川さんに割り当て。彼は、日帰りで荷物が少なかったからであって、年功序列のせいであった訳では…。

第一の切れ込みの所は、先日の行方不明騒動のせいで、結構踏み込まれており、余計迷い込み易そうになっていた。帰りは、案の定先頭が直進してしまう。ホント、あなた任せで歩いてはおれない。そして、第二の切れ込み。この頃はだいたいここで休憩だ。確かに荒れてはいるけれど、ステッキの行列にうんざりの私には、好ましい静けさだ。まして回りにワンゲル仲間がいてくれたなら、♪我がベルクハイムへ～♪で、ウキウキ。

出島をまわり込んでしまうと篤志家の御蔭で草ヤブからは解放される。吊橋が見えてくると、もう倉谷は近い。そのうえ、吊橋を渡った所には、ちゃんと労作が立っているのである。そこからわずかで「倉谷集落跡」がまた立つ。ワンゲルＯＢであれば、高三郎はずっと奥で、何で？であるけれど、行政がらみ、作業の都合がらみでいくと、そうそう、登山のペース配分に便利なように配置できる訳でもない。日帰りハイキングなら、倉谷までであろうからという発想もある。山中では？？？の道標もあるが、発注者、製作者、設置者がバラバラなのである。まだ塗料が手につくようなほやほやを受け取って、現場で初めて文字を見ることになるのも現実。利害がからまない事でも、とかくこの世は合理的にはいかないものなのである。

【吊橋を渡り終えた所に立つ標柱】
吉田　吉本　　舟田
奥名



【戸口部隊。この後の戸が締まり、鍵がかかる状態への調整が、デリケートだったよう】
吉本　　北川

２週間ぶりのベルクハイム。鍵をあければ、あ～れ～！カメムシ館であった。やっぱり自然は手強い。多少物綺麗にしたとて、彼らの絶好の越冬場所であることに変わりはない。箒であらたか掃き出し、一巡するとまた湧いてくる。赤布をまくりあげるとびっしりのカメムシ。ギャーの後これも一掃。内部に慣れた目で見上げたら、天井にもびっしりであった…諦めた。せめてもの抵抗に蚊取り線香をおき、そばで食当をする。

どうやら水が出るようになり、男性軍は、軒下の修理組と、戸口の修理組に別れて作業。私はその合間に、出たゴミを掃除。なにせこの手のことはやったことがないし、そばでうろうろすれば嵩張って邪魔になるだろうし…賄い婦以外の時間は、何かをおろおろとやっている。

ベニヤ板と、外壁のトタンの間には、断熱材もどきに枯葉が詰め込まれていた。ネズミかリスかの類が巣にしていたのだろう。まくる度に「ウワー」「ここもダメや」の声。あちこちダメになっているらしい。平成５、６年の大修理時には、屋根と、内外壁を張り替えたのであり、骨組には触っていない。この２代目ベルクハイムを建てた当事者である北川さんも、30年ぶりに「その後」をめくって見ることになった訳である。

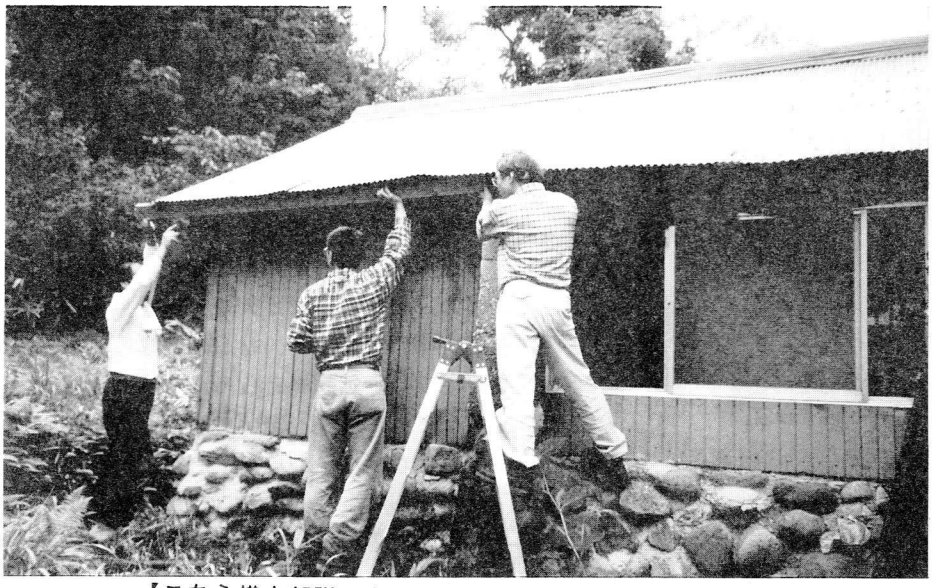
どこまでダメになっているか？どこを補修しておけばいいか？だんだん、やめられない、止まらない状態になって、かなりが剥出しになってきた。「きれいになった」とは言い難くなってきたものの、骨組の確認は大事である。吉本さんが金鎚で叩いていくと、なるほど虚ろである。「ホレ、ここ全然効いとらん。ヤバイナ。こっちで打っても、結局、浮いてしもとるんや。」私、全然わからない。ただ、倉谷に何軒かあった廃屋が、あれよの間に朽ちたことなら知っている。早めに手をうっていくしかない。

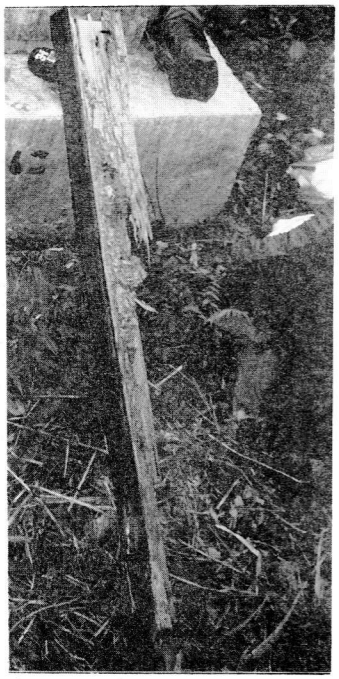
日帰りの北川さんは、戸口を完成させた後、帰っていった。あとの方々は、根太の取り替えを始めたものの、これもまくって根太を叩いていくとあちこちに虚ろな箇所があった。材料を吟味し、防腐処置も考え、それらを春のボートで大量搬入することを考えなければならない。厄介ではあるが、それは内部のことだから、屋根さえあれば、ぼちぼちでやっていける。屋根をもたせることが先決になりそうだ。

実のところ、２週間前、この小屋を誉めていただいたナカオのプロのメンバーからはいろいろ査定いただき、示唆もいただき、卸からの材料も提供してあげようのご好意もいただいた。ただ、「豚に真珠」の情報であったし、ではといって橋渡しも？の惑いがあった。この小屋は初代から、プロの手を借りず、その時のワンゲルの総力で、建設され、維持されてきた。それが愛着の根底であるし、いざとなれば寄付をお願いできる根拠でもある。ＯＢの技量でましになってくる分はいいけれど、そして、小屋が潰れてしまえば話にならないのだけれど、みんなでワイワイ、その時の技量やできる協力の範囲であっていい気がする。プロの使い勝手のいい刷毛より、棒切れに軍手を巻いてその結果そこらじゅう塗料だらけになってしまった…の方がベルクハイムにはあっていると思えるのだ。

夕食は、補修の段取りも話し合いつつ、ともあれきれいな床が張れている現在、もう一度「月見の宴」で皆さんをお誘いしてみては？になった。かつて歓送登山が秋であったこと、また、現役サイドが半年は新人育成にあたっていることから、小屋での行事は秋に行なわれることが多かった。

しかし、倉谷はなんといっても、春がきれいだ。ダム周辺路も春の方が、歩き易い。山菜をメニューにできるし、日も長い。何よりボート





【こちら横木部隊。右のようにボロボロ状態】

が使えて、人も食材もテントも倉谷に直行させることが可能だ。もちろん、シャクナゲと残雪の、高三郎が一番いい時期でもある。以上の利点から、次回は春にお誘いをやってみることになった。名付けて「シャクナゲの宴」。次回の会報と号外で、本腰を入れてお知らせしてみることにしよう。

そんな前向きの話を、なんと、カメムシをロウ地獄に落としながらやっていたのだ。ロウ地獄に落ちた彼らは複数の芯になり、シドニー五輪の聖火の如く盛大な炎になる。その行為は、執行者の表面上の穏やかさ、しとやかさ等とは全く無縁に持続された。さしもの天井びっしりも消滅し、人間が生態系の頂点に立つことを実証した。それにしても仲間の炎に釣られて、次々おりてくるカメムシもカメムシである。ヒトより種としては生き延びていくのであろうけれど、カメムシのような人生は真っ平だ。

翌朝彼らの方は、ちゃんと朝のおじやにも、残りものの豚汁にも紛れこんでいて、それなりに報復をとげていた。だが、すっかり鼻が馬鹿になってしまっていた皆様は、気付かなかったよう。

本日、辰野さんは設計の続き、奥名さんは自然解説員の仕事でこのまま医王山に直行という訳で、早々の小屋仕舞へ移る。

帰路は百万石レースのマラソンコースに沿っての走行の羽目になった。小屋行きも物好きであるけれど、マラソンも相応に物好きの世界であるよう。18期岡部さんが出場していることを知っていた私は、抜きつ抜かれつの車窓から探してみた。そして、蛍光グリーンウェアの彼をちゃんと見付けてしまった。信号他のせいで、三度も「岡部さ～ん、頑張って～」の声を張り上げることになった。気付かなかったのかと思ったら、後日、彼の方は必死で走っていて返事ができない状態であったとのこと。そりゃそうだ。

今回も「金沢は狭い！」でオシマイ。

ワンゲルは、次々新人が入ってくるのが長所です。短期間にそんな新人がリーダーとなり、部を背負う人材に成長していくのも魅力です。

それゆえに短所は、年季を積むことができない、バリエーションルートにまで手が伸びにくいことであるようです。

その短所を補ってきたのが、部の記録であり、部誌でした。先輩の体験がレディネスとなり、情報を集め、同じ指向の仲間を得て、前例プラスαで審査を通し、バリエーションを広げることが可能になったのです。部誌でなければ入ってこない情報である犀奥域の活動は、休刊により決定的打撃を受けることになりました。

では、部誌は今時流行らないのかといえば、某氏は弟のサイクリング部の部報を見たといいます。部外者である自分も、次々延ばしていくその部のテーマ報告が面白かったとのこと。「６年に一度？そんなの記録といえる？次にどんな活動をしようの、部の方向がでてくるの？」…同感！

外部がとやかくいわなくても、記録を出していけば、おのずと、自分達が光れる活動や、ＫＵＷＶならではの方向が見えてきます。

山渓に採用された26期畠山潤氏の記録。休刊で掲載されることのなかった第７次白山－ＢＨＰＷ30期野田和裕氏の記録。また初めての夏期踏破であり合宿でもあった、白山・ＢＨParty の37期山本英男氏の記録（ＢＨ33～38号p103転載）を紹介します。